ノデ節、カラ節のル形と夕形について

神　永　正　史

<要旨>

事態間の客観的因果関係を表わす従属節のうち「～ので」という従属節（以下、ノデ節と呼ぶ）と「～から」という従属節（以下、カラ節と呼ぶ）には、従属節の述語がル形であって、それが主節の事態より先行する事態をあらわすことがあるという現象が見られる。この現象が現われるノデ、カラ節を観察してみると２つの特徴が見いだされる。１つはそこで用いられている従属節述語動詞にはアスペクト的に制限があり、限界（達成）性（telicity）の含まれている動詞は用いられないということである。他の１つは主節と従属節で主語が異なるということである。第１の特徴についてはなぜそのような制限が生ずるのかを他のアスペクト素性を含んだ動詞との比較を通して明らかにし、第２の特徴については従属節の述語動詞のアスペクトおよび文の概念レベルより説明する。またこれらの説明を通して、この従属節事態先行の現象がその従属節と主節から成る文を理解するうえでいかなる効果をあげるために生じたものかも明らかにしていく。

１．従属節事態先行型

原因・理由を表わすノデ、カラ従属節では、主節が仮にタ形をとるとき[*1]、従属節がル形をとれば従属節事態が主節の後に起こり（「父ガ来ルノデ（カラ）、部屋ヲ掃除シタ。」）、タ形をとれば前に起こる（「父ガ来タノデ（カラ）、ゴ馳走シタ。」）。またテイル（イタ）形をとると、従属節の述語が状態、（動作、結果の）持続を表わし、主節事態との同時を表わす（「父ガ来テイル（タ）ノデ（カラ）、ニギヤカダッタ。」）。しかし一方では従属節述語がル形をとるとき従属節事態が主節事態に先行するという現象がみられる。この現象については沈 (1984)、岩崎 (1994) の先行研究がある。岩崎 (1994) ではルノデ／ルカラの型を次のように例文を添えて３つに分類している。

①従属節事態先行型

彼は「本船はイタリアへいくのですか」と訊くので（船では自分の船のことを本船と呼ぶ）、私はうっかり「イタリア、ドイツ、そのほか沢山いくのだ」と答えたらまわりにいた連中がドッと笑った。

従属節の述語がル形であるが「彼は～訊く」という従属節事態が「私は～と答えた」という主節事態に先行していることを表わしている。

②従属節・主節事態同時型

美沙が立っているので、信夫もそのまま通りすぎるわけにはいかなかった。

従属節の述語が結果（状態）の持続を表わすものなので、従属節事態「美沙が立っている」は「通りすぎるわけにはいかなかった」という主節の事態と同時である。

③従属節事態後続型

三原は、今晩の夜行に乗るから、明日の朝早く函館駅に出向く旨の伝言を頼んで公安室を出た。

従属節事態の「今晩の夜行に乗る」が「公安室を出た」という主節事態の後に起こることを表わしている。

本稿で考察する現象とは岩崎（1994）のあげた従属節事態先行型のルノデ／ルカラの形をもつものである。

2．ノデ節、カラ節の概念レベル

原因・理由のノデ、カラ従属節の用法としては、(1)事態間の客観的因果関係を表わす、(2)発言、判断の理由や根拠を表わす、の２つがある*2。本稿が考察対象としている従属節事態先行型のルノデ／ルカラは従属節事態と主節事態が因果関係にあることからわかるように(1)の用法のものである。益岡 (1997) は(1)の事態間の客観的因果関係を表わすノデ、カラ従属節の文の概念レベルを現象のレベルのものとしている*3。現象のレベルは、事態命名のレベルがある事態を１つの型として総称的に表わす（例えば「雨が降る」、「梅雨前線が雨を振らせる」）のに対し、ある型の事態が特定の時空間に実現する個別的な事態を示す（例えば「雨が降った」、「梅雨前線が雨を降らせた」）。また（これらの例文からわかるように）この特定の時空間での事態の実現を捉える現象レベルの方にはテンスが関与するとしている（具体的に示せば「雪が激しく降ったので、新幹線がとまった」のように従属節が「タ」形を示す）*4。このように益岡 (1997) に従えば、事態間の客観的因果関係を表わすノデ、カラの従属節の形はタカラ／タノデとなるので、従属節事態先行型のルカラ／ルノデはその異形とみなされる。なおその場合主節は「ル」形、「タ」形の両形がありうるが、従属節事態先行を明確に示す必要上本稿では主節が「タ」形のもののみを扱う。

3．従属節事態先行の例文

従属節事態が主節事態よりも先に起こる従属節事態先行の場合はタカラ／タノデとなるのであるが、同じ状況をルカラ／ルノデでも表わせることが多くの例より明らかである。しかしながら実例から見るかぎりすべてのタカラ／タノデの状況がルカラ／ルノデでも表わせるわけではない。どのような条件のもとに従属節事態先行型のルカラ／ルノデが成立できるのか、またどのような条件のもとでは従属節事態先行型のルカラ／ルノデが成立できないのかを実例から具体的に見ていく*5。

3.1　ルノデ／ルカラ

まずルノデ／ルカラが成立している従属節事態先行型の例を順にあげる。

(1)　「二人とも応接間に通せ」と理一がいうので、女中のつる子が悠一と修一郎を応接間に通した。(冬の旅　p.539)

(2)　純子は、「ご苦労さん」と声をかけ、「谷口さんを呼んでちょうだい」と言った。「谷口ーー」
純子が気やすく呼ぶので、警官も面食らったらしい。(女社長　p.720)

(3)　「どうしていつもの人がこないのだ」としきりに聞くので、ぼくも何となくムッとして「急に頼まれたんだから知るわけがないでしょう」と、すこし強い調子でいった。(新橋　p.31)

(4)　兄は筏のへりにひょろりと立って、なんの用だと大声で問うので、私も大声で、ほかでもない、いつもの金の無心であった。(忍ぶ川　p.15)

(5)　困った場面を、いかにも大真面目に話すので、ぼくの方は腹をかかえて笑ったが、ミセス・ストルーヴにしてみると、いよいよ神経に障るらしかった。
(月　p.272)

(6)　では、どうすればいいのよ、と奴が言うから、俺は、まず昔に還る方法としていっしょにベットに入ろうと言ってやった。(冬の旅　p.625)

この種の例文はノデ節のものがカラ節よりも圧倒的に多いが、このことはカラ節は事態間の客観的因果関係を表わすのには不向きであるという事によるものと思われる[*6]。

(1)〜(6)は従属節の述語動詞が「〜と言うので／〜と言うから」のような「言う」を典型とした発話の動詞の例であり、この動詞が従属節事態先行型には多く用いられているのに気づく（採取したルノデ／ルカラの実例 34 のうち 18 例)。岩崎（1994）でも同種の動詞が 4 つ 挙げられている。

(7)　深い四つの傷口から間断なく新しい血が湧くので、その上を鉢巻きの手拭でかたくしばった。(忍ぶ川　p.606)

(8)　あまり血が出るので、何ということもなく「私」という血文字を書いてみた。
(二十歳　p.55)

(9)　傷は動悸とおなじ調子で痛むので、私は上がり框から腰をあげることができなかった。(忍ぶ川　p.608)

(10)　里子は部屋の炬燵蒲団に頭を付けてうとうとしていたが、うしろの廊下で足音がするので、背中をのばしてふりむいた。(雁の寺　p.156)

(11)　喜助は風のかげんで、にわかにくすぶりはじめた囲炉裡の白煙が顔にふりかかるので、目をしわばませていたが、じっとだまって耳をたてている。
(雁の寺　p.360)

(7)〜(11)は自発的動きを示す自動詞の例であり、岩崎（1994）でも同種の動詞として「泣く」、「笑う」、「つづく」が挙げられている。

(12) 鼠が枕許を走るので、鮎太は起き上がって電灯をつけた。と、同時に、眠れないのなら、勉強しようかと思った。（あすなろ　p.41）
(13) 太郎は何も言わないのに、久男は、大蒜の一かけをとって、小さくたたき、それを汁用の鍋にいれてしまった。二人は、申し合わせたように、とんとんと働くので、食事の用意は、たちまちできていった。（太郎　p.110）

(12)、(13)は意志的動きを示す自動詞の例である。岩崎（1994）でも同種の動詞として「逸走する」、「押し合う」、「会話をする」が挙げられている。

(14) 「黒川さんはなにをやっているのですか」
修一郎は、あまりにも黒川がこっちをじろじろ視つめるので、つい訊いてしまった。（冬の旅　p.830）
(15) 女は自動車の警笛など全然注意には入らぬらしく、却って自分に注意の薄らいできた吉田の顔色に躍起になりながらその話を続けるので、自動車はとうとう往来で立往生しなければならなくなってしまった。（檸檬　p.489）
(16) 鮫島は好奇な目もとでこの光景をみていたが、喜助が母屋の方に案内するので、作業場をもう少し見学したい心のこりの顔をしながら、尾いていった。（雁の寺　p.353）
(17) 「父さんの顔、そっちへむかなくなってせえ、こっちへきてみてやんなせ。」
母が団扇で招くので、私は座ったまま、父の寝床ににじり寄って顔をのぞいた。（忍ぶ川　p.361）
(18) 「貴様がへんなことをするから、みな驚いたんだ。出しぬいたと思ったらおおまちがいだ。」（忍ぶ川　p.550）

(14)〜(18)は他動詞の例であり、岩崎（1994）でも同種の動詞として「ノックする」が挙げられている。

3.2　タノデ／タカラ

次に従属節事態先行のタノデ／タカラであったのを*7、ルノデ／ルカラに変更して不可能であったものをあげる。

(19) エルザが姿を現したので（*現わすので）、父はダンスをやめて、彼女を迎えるために、機械的なお世辞をつぶやいた。（悲しみよ　p.73）
(20) 一方の厚子は、お茶の水で前に座っていた人が降りたので（*降りるので）、

そこにすわったのであった。(冬の旅　p.239)

(21) 清香は去年の夏、近村の金持ちの長男のところへ嫁いで行ったということだったが、兄が発病したので(*発病するので)、身の廻りの世話をするために戻って来ていた。(あすなろ　p.251)

(22) 青山さんは婚約者が決まったので(*決まるので)、すっかり心理的に落ち着いてしまったらしく、くわえ煙草でトランプをくばりながら、
「やあ、君か、こっちに入れよ。」
などと、自分の家のような言い方をしていた。(太郎　p.487)

(23) 口調が急に甘やかなものに変わったので(*変わるので)、小兵衛がおどろいて、三冬を見た。(剣客　p.77)

(24) のみならず、兵士たちは町が寡婦のように蒼ざめて薄暗いまなざしですわりこんでいるのを見て、このうえ食糧が不足することを恐れ、私たちに難民の救済をきびしく禁じたから(*禁じるから)、いよいよ彼らはしめだされることとなった。(パニック　p.447)

これらの例文に現われた従属節内の述語動詞は、いずれも瞬間的に終了してしまうような動作・作用を表わし、しかもその動作・作用の終局面で何らかの(結果)状態に到ることを意味する動詞である。岩崎(1994)の挙げる同様のふるまいを見せる例文中に現われた述語は、「ついた(着いた)」、「変わってしまった」、「故障した」、「出た」(去ったの意味)、「なくなった」の6つで、いずれも筆者の例文中のものと同じ性格をもつものである。

(25) 見事にトルコ側の坑道を掘りあてたギリシャ兵は、坑道をささえていた支柱を焼き払ったので(*焼き払うので)、崩れ落ちた支柱の下敷きになって、何人もの敵方の工夫が死んだ。(コンスタンティ　p.347)

(26) 不意に閃光が煌めいて爆風が起こり、一枚の瓦が飛んで来て小母さんの頬の肉を削り取ったので(*削り取るので)、共済病院へ行った。(黒　p.191)

(25)、(26)の従属節内の述語動詞は(19)〜(24)の瞬間的な動作・作用を表わすものとは異なり動作(働きかけ)が終了時まである程度の時間(期間)を必要とし、かつその終局面で何らかの(結果)状態に到ることを意味する動詞である。岩崎(1994)の挙げる例文中には同様のふるまいを見せる述語は見当らない。

4．従属節事態先行型の特徴

3.1で示された従属節事態先行型のルノデ／ルカラを含む文と3.2で示された従属節事態先行型になりえないタノデ／タカラを含む文は各々どのような特徴をもつものなのだろうか。3.1と3.2の例文等を比較しながら検討を進める。

4.1　先行研究の問題点

沈（1984）は従属節事態先行型（沈は「脱テンス」と呼んでいる）について、「(脱テンスは）主語が同一の場合には、思考活動、心理状態を表わすような動詞にしか使われない。(中略）　普通の動作動詞（とくに瞬間動詞）で同一主語の場合、脱テンスになりにくいと思うが、それは普通の動作動詞を使うと前ー後の関係がはっきりしてくるからだろう」と述べ、また「「～過去形ので～過去形」の形で、前節述語が動作性の場合、前節の動きが発話時より前だけでなく、後節より前だったらその前節の過去形を非過去形にいいかえることはできない」としている。この説の問題点は「(普通の）動作（性）動詞」のより細かな分類に基づいた考察がなかったことであり*8、この件について岩崎(1994) の説とともに以下で述べていく。

岩崎 (1994) は従属節事態先行型のルノデ／ルカラを含む文について、従属節事態先型になりえないタノデ／タカラを含む文と比較して、その語彙的特徴と統語的特徴を述べている。語彙的特徴として「従属節事態先行型になりえないタノデ／タカラを含む節内の述語が過程をもたない動きを表わすものであるのに対し、従属節事態先行型のルノデ／ルカラを含む節内の述語は過程をもつ動きを表わすものである」としている*9。

ここで言う「過程」とは「動きが運動として展開している期間」をさすが*10、この岩崎の説にも問題がある。それは「過程をもつ動き」を示す動詞には 3.1 の例文に見られるようにある時間（期間）継続して行なわれるような動作・作用のみを表わすものも属するが、それ以外に動作・作用がある時間（期間）継続して行なわれ、その終局面で何らかの（結果）状態に到る意味をもつ動詞も属するのである。ここでいうある時間（期間）継続して行なわれる動作（の働きかけ）及びその終局面状態をも含んだ意味をもつ動詞とは、例えば、建設・生産を意味する「作る」の意味をもつものとか破壊・消滅を意味する「壊す」の意味をもつものなどであるが、この種の動詞は 3.1 の例文の従属節内には見当らない*11（さらにいえば継続的な動作・作用のみを表わす動詞でもなんらかの外的限界を設けることによりその終局面を含むものに変わる*12)。

4.2　語彙的特徴

以上のように沈（1984）と岩崎（1994）の従属節事態先行のルノデ／ルカラの述語動詞に関する説は不十分なものと言わざるをえない。筆者は両者が各々の説の中で「瞬間動詞」と「過程をもつ動き」というアスペクトに言及していることに着目し、この方面から従属節事態先行のルノデ／ルカラの述語動詞に対する考察を進める。

4.2.1　語彙的アスペクト素性

アスペクトによる動詞の分類として広く認められているものとしては、状態 (state)（動きを表わさない状態的なもの)、活動 (activity)（開始すると妨げられない限り続けられる動きで、意図的なものと自発的なものがある)、達成 (accomplishment)（なんらかの活動の結果、最終的な目標（状態）に到る行為、動き)、到達 (achievement)（瞬間的な

動作・作用でなんらかの目標（状態）に到る行為、動き）の４つに分類されたものがある*13。これらは次の６つの語彙的アスペクト素性 (lexical aspect feature)、すなわち±動作性 (dynamicity), ±継続性 (durativity)、±限界（達成）性 (telicity) により分類されたものであるが*14、Olsen(1997) はこれらの語彙的アスペクト素性のうち－（マイナス）のものは文脈や他の文構成要素によっては削除されうるものだとしてこれを除き、このような文脈や他の文構成要素によっても失われることのない＋（プラス）の素性のみに基づいて動詞を分類することを主張している。彼女に従えば従来用いられている語彙的アスペクト素性による４分類は次のようになる。

状態：　[＋継続的 (durative)]
活動：　[＋動作的 (dynamic) ＋継続的 (durative)]
達成：　[＋動作的 (dynamic) ＋継続的 (durative) ＋限界(達成)的 (telic)]
到達：　[＋動作的 (dynamic) ＋限界(達成)的 (telic)]

この４つの分類は各々典型的な語を基準においてなされてあるので、実際の語にあたってみればこの４つのどれかに近いもの、遠いものというように区分されるものが多い。この分類で重要な点は達成、到達における動作・作用が共に終局面まで至り、そこで何らかの（結果）状態に達することであり、これらがアスペクト素性では限界（達成）性 (telicity) の表示で表わされていることである。これらのことを考慮にいれて 3.1 と 3.2 に現われた述語動詞をみてみる。

4.2.2　従属節事態先行型の述語動詞

まず 3.1 よりみていく。最初に示した「～と言う」に代表される発話の動詞であるがこれらは活動の動詞である。意志的な動きを示す自動詞もこれにはいる。次に自発的な動きを示す自動詞であるがこれらも同様に活動の動詞にはいる。ただ (8) の「出る」であるが、これは一見到達の動詞のようにみえる。しかし鷲尾・三原（1997 pp. 117-118）はこのような動詞の１つである「散る」という語を用いて次のような例文をあげ、

(27)　a．庭に桜の花片が散っている。
　　b．桜の花片がヒラヒラと散っている。

「『散る』は結果動詞なので*15、(27a) は結果持続の解釈になるが、動作・作用にある程度の時間幅を要求する場面である (27b) のような場合は動作持続の解釈もあり得る」としている。このように 3.1 の「出る」は (27b) の「散る」と同じく結果よりも動きそのものに重点をおいたものであることは明らかであり*16、分類するとすれば到達ではなくむしろ活動の動詞にはいる。次に他動詞であるがここで述べられている動作は瞬間的なものではなく、ましてや終局面の存在まで意味するものではないので、これらも活動の動詞に含まれる。

3.2 の(19)～(24)に現われた動詞はその動作・作用が瞬間的であり、かつ結果としてそれ

が終局面で何らかの状態に到ることを意味するものであるから到達の動詞であるといえる。

4.2.3　従属節事態先行型の効果

3.2の⑲～㉔の例文より明らかなように到達の動詞は従属節事態先行型になることを許されないがその理由は何であろうか。このことを説明するまえにこの従属節事態先行型がいかなる目的のため、いかなる効果をあげるためになされる現象なのかを考えてみる。この件でまず思いつくのがルノデ／ルカラ～タの形をとる1の②で現われた従属節・主節事態同時型の文である。つぎの例文の従属節内述語は㉘が動詞の動作持続、㉙は、形容詞でいずれも状態を表わしこの型に属するものである。

㉘　二百羽のヒヨコは夜が更けてもひっきりなしに騒いでいるので、ガラクタを引っぱりだし、押し入れの中にいれて襖をしめた。（新橋　p.32）

㉙　栄子が出てきた。電灯がほの暗いので、栄子の化粧の白さが浮き上がって見えた。（青春　p.55）

これらの文は従属節事態が起こる、またはその状態にある時が主節時と同じで、かつ視点が主節にある時にのみに現われるのであるが*17、タ形を用いた絶対時制の文に比べて、文全体が1つの視点で統一されているので臨場感があり内容をスムーズに捉えやすいという利点をもつ。状態はアスペクト素性の限界（達成）性（telicity）をもたないので、同じく限界（達成）性（telicity）の欠けた動詞（＝活動の動詞類）を同じ形（＝ル形）で用いて同様の文効果をねらったのが従属節事態先行型の文であると考えるのが自然であろう*18。それゆえ従属節事態先行型の文の従属節事態は時間的に主節のそれに限りなく近いものになる。ただし「言う」の類の発話動詞は、「発話する」という行為自体と共にその発話内容に対する反応を表わすことが主節の機能・役割であるという関係から、必ずしも主節時は従属節時に近い必要はない。例を㉚、㉛に示す。

㉚　志乃は懐妊を母に告げねばならなかったが、その前に慎重を期して、医師の確認がほしいというので、ある日、散歩を装って同伴した。（忍ぶ川　p.141）

㉛　妻があまり八釜しく言うので私はその夕暮、レントゲン写真をもって勝呂医師をたずねた。（岩崎(1994)）

4.2.4　到達の動詞類

しかしながら3.2の⑲～㉔の例文に現われる到達の動詞類は、従属節事態が時間的にいかに主節事態に近いものであってもその動作・作用が必ず終局を迎えるものであり、その終局の後に主節事態が起こるという時間構造になっているので、この動詞類を述語動詞にとる従属節にとっては、従属節・主節事態同時型に似せた従属節事態先行型のよう

に従属節の述語にル形を用いるということは不可能であり、むしろ先行する従属節事態と後続する主節事態にはなんらかの時間差があることを明示する必要があり、それがために従属節述語はル形ではなくタ形をとらざるを得ない。これが3.2の⑲〜㉔の例文の到達の動詞が従属節事態先行型になることを許されない理由である。

4.2.5　達成の動詞類

最後に3.2の㉕、㉖の例文について述べる。これらの従属節述語は「ある時間（期間）の動作・作用の働きかけの結果、その終局面で何らかの状態に到る」ことの意味をもつ動詞、すなわち達成の動詞である。

4.1で述べたように沈（1984）と岩崎（1994）の従属節事態先行型の現象を起こす動詞に関する説は内容的に不十分なものであり、沈（1984）の場合は述語動詞分類が不十分なままの考察（活動、達成の動詞には全くふれてない）によるものだが、岩崎(1994)の場合は3.1の例証が示すように、達成の動詞類も従属節事態先行の現象を起こす動詞には含まれないという事実を見逃したことである。

ではどうして達成の動詞類は従属節事態先行型の動詞に含まれないのだろうか。それは達成の動詞の事象構造（event structure）を見てみれば明らかである[*19]。

達成 (accomplishment) (x,y)　→　活動 (activity) (x) 状態 (state) (y)

xは活動の項（＝主語）を表わし、yは状態の項（＝目的語）を表わす。この図は主語xの活動による働きかけにより終局において目的語yに変化がおこりその結果ある状態に到る事を表わしている。このように達成動詞の場合は意味する内容として活動終局面まで含むので、到達の動詞と同じ理由により従属節事態先行型の現象を起こす動詞には成り得ないのである。さらに到達の動詞と異なり達成動詞のxの活動にはある程度の時間（期間）を必要とするので、従属節時は主節時と異なる（それ以前となる）。

しかし㉕、㉖のような達成の動詞がこの種の型に用いられている例は少ない（採取したタノデ／タカラの実例34のうち3例）。従属節と主節の間にある程度の時間（期間）が存在することが明らかなこのような述語動詞は、主節と緊密な因果関係を必要とする従属節においては使用は限られたものになるものと思える。

ノデ節、カラ節の述語に活動の動詞、達成の動詞が用いられた場合、主節との兼ね合いでその動詞が現わす動作のどの局面が強調されるかという点にも興味があるがここではふれない[*20]。

ここまでの考察より語彙的アスペクト素性による動詞分類に基づけば次のことがいえる。

従属節事態先行型のノデ節、カラ節内の述語動詞は語彙的アスペクト素性の限界（達成）性 (telicity) を欠いたものである。

4.3　統語的特徴

これまでは従属節事態先行型に関してのノデ節、カラ節内述語の語彙的特徴について述べてきたが、沈（1984）（4.1で既述）と岩崎（1994）が述べているこの型のもう1つの特徴に「主節と従属節では主語が異なる」という統語的特徴がある。この特徴は3.1の例文を見ても顕著であるが、さらに別の例文をみてみる。

次の2つの例文ではどちらも従属節述語が活動の動詞であるが従属節と主節の主語が同じというものである。

(32)　「母さん、これがメロンていうものなの。僕生れて初めてたべた」とろくでもないことを喚いたので（*喚くので）、母親におしりをぶんなぐられた記憶がある。（太郎　p.301）

(33)　ちようどある文房具屋の前を通ったので（*通るので）、いっそここで紙でも買っていこうか、そうすれば、彼を追い払う口実にもなろうからと、ふとそんなふうに考えたのだ。（月　p.462）

2例とも従属節事態先行型になる語彙的条件は満たしているが、ともに従属節がタ形をとっており、したがって従属節事態先行型にはなれない。このことからも従属節事態先行型が「主節と従属節では主語が異なる」という統語的特徴をもつことが明らかである。

4.3.1　統語的特徴にたいする岩崎（1994）の説

この特徴の解説として岩崎（1994）は、まず「従属節事態先行型のノデ節、カラ節に示されている事態は、主節の主語なる人物の観察であり、主節の主語なる人物はその観察を主節にさしだされる動作の理由としている。」と説き[*21]、次に従属節と主節では主語が異なる理由として「主節の主語なる人物が、同じ本人の動作を（いわば客観的に）観察するわけにはいかないためである。」としている。主節の「主語なる人物」の存在を前提としたこの説は、しかしながら例文(13)、(15)からもわかるように「主語なる人物」が存在しない従属節事態先行型のノデ節、カラ節もあるので（(13)では「食事の用意」が、(15)では「自動車」が主節の主語となっている）彼の説は肯定しがたい[*22]。以下においてこの統語的特徴についての筆者の説を述べる。

4.3.2　統語的特徴にたいする筆者の説

4.2.3で従属節事態先行型のノデ節、カラ節事態は時間的に主節事態に近いと述べた。しかし近いといっても従属節・主節事態同時型とは違って僅かであれ2節間には時間的差がある。従属節事態先行型のノデ節、カラ節では同時型と同じような効果をねらってル形を用いるが、さらに従属節と主節の主語まで同一のものにすると各々の事態が一続きのものとなり、これらを「間に時間的差のある異なった2つの事態」と認識するのはもはや困難になる。それゆえこのような場合には、従属節と主節が別々の2つの事態で

あることを認識させるために、従属節はタ形をとらなければならないことになる。またこうすることにより従属節の現象レベルにテンスが関与することにもなる*23。
この説の証左として次の例文（作例）(34)、(35)をあげる。

(34) *太郎ハ2時間走ルノデ、疲レタ。
(35) 太郎ハ（モウ）2時間（モ）走ッテイルノデ、疲レタ。

(34)は活動の動詞を従属節述語にとっているが従属節と主節が同一主語のため非文となる。しかし(35)では同じ動詞を用いても動作持続の形（テイル形）を使っているので従属節時と主節時がまったく同一となり、従属節と主節の主語が同一であっても非文でなくなる*24。

以上4.3で述べてきたことから次のことがいえる。

従属節事態先行型の文では従属節と主節の主語が異なるが、それは、2節の主語が同一であると従属節と主節の事態の間に時間の差を認めなけらばならず、したがって、従属節にタ形を用いるので、従属節事態先行型になれないからである。

5．おわりに

本稿ではノデ節、カラ節の従属節事態先行型の現象について、まずこの現象を生む従属節述語動詞について動詞の語彙的アスペクトの面から観察を進め、その動詞は語彙的アスペクト素性の限界（達成）性 (telicity) を欠いている語であることを明らかにした。具体的には、状態、活動、達成、到達のうち活動の動詞類がこれに当たる。次にこの現象の文の従属節と主節では主語が異なるという点を従属節の述語の語彙的アスペクトおよび文概念レベルの両面からその理由を述べた。また論を進めるなかで従属節事態先行型がどのような効果をめざしたものかにも言及した。

従来の研究では、ある動詞のアスペクトを限界（達成）性 (telicity)、継続性 (durativity)、動作性（dynamicity）のうちどれか1つの素性の有無からのみ規定してきたが、動詞はそれが含み得るすべての素性について検討されるべきであり、そうすることによりその動詞を（事象構造などを通して）より深く理解できる、という事実をささやかではあるが本稿で示したと思う。

【注】

*1　非過去を示す時制形式をル形と総称し、過去を示す時制形式をタ形と総称する。

*2　ノデ節では主節は意志的事態も表わし得るので、その場合、事態間の客観的因果関係を表わすという性格は、主節が無意志的事態を表わす場合よりも弱くなる。
なお益岡（1997 pp.124-126）はノデ節、カラ節が判断・発言の理由や根拠を表わすものとして次の例文をあげている。
(1) 途中でビーと鳴ったから、公衆電話からじゃないんですか。
(2) すぐ結論を出さなくてもいいでしょうから、よく考えて見たらいい....。
(3) 用事がありますので、これで失礼します。

(4) また今度来るに違いないから、その時まで預かっておくわ。
この用法のノデ節、カラ節には（真偽判断や丁寧の）モダリティが含まれるが、これらのル形は本稿の考察の対象外である。

＊3　益岡（1997）は文の概念レベルを「対象領域（命題）のレベル」と「主体領域（モダリティ）のレベル」に分け、さらに、各々を「事態命名のレベル」、「現象のレベル」と「判断のレベル」、「表現・伝達のレベル」に分けている。

＊4　下線は筆者による。

＊5　2つの事態間の因果関係を示すノデ節、カラ節がル形をとっても、その事態が日常的、習慣的（非テンス的）な次のようなものは考察の対象外である。
(5) 尚中は午前中は外来患者を診るので、入院患者の診察は午後であった。(花埋み。p.107)
(6) きんはこれまでもこの足の悪い娘の予感が妙にぴったり当たるので、時々われながら気味の悪くなることがあった。(沈(1984))

＊6　益岡（1997）はカラ節が事態間の客観的因果関係を表わすのに不向きである例として次の文をあげている。
(7) ?雪が激しく降ったから、新幹線が止まった。
(8) ?時間があまりなかったから、結論はでなかった。

＊7　時点を表わす時の副詞と共起しているなど、明らかに絶対テンスと思われるタノデ／タカラの節は考察の対象外である。なお絶対テンスについては工藤（1989）と向井（1997）に拠る。

＊8　沈のこの説では「(普通の）動作（性）動詞」には思考活動、心理状態を表わす動詞以外のすべての動詞が含まれることになってしまう。

＊9　岩崎 (1994) は注で「過程のあるなしは、テイル形にして動作の進行を表わせるかどうかや、「～シハジメル」とすることができるかどうかで判定できる。」として
つぎのようなテストフレームを設けている。
歩ク／歩イテイル（進行）／歩キハジメル――――過程をもつ
死ヌ／死ンデイル（結果）／＊死ニハジメル――――過程をもたない

＊10　森山 (1988) に拠る。

＊11　例えば岩崎 (1994) のテストフレームに「作る」をあてはめると、
作ル／作ッテイル（進行）／作リハジメル ――――過程をもつ
となり従属節事態先行型が可能の動詞となる。しかし次の例でも明らかなように
「作る」の類の動詞は従属節事態先行型になりえない。
(9) 太郎ガ家ヲ新築シタノデ（＊スルノデ)、祝イヲ送ッタ。(作例)

＊12　工藤(1989)、Smith(1991)参照。＊9の「歩ク」を例にとった次の作例のように、
(10) 太郎ガ駅マデ歩イタノデ（＊歩クノデ)、顔見知リノ駅員モビックリシタ。
「駅マデ」と外的限界をもうけると従属節事態先行型になりえない。

＊13　4分類の内容はSmith(1991)、影山(1996)、鷲尾・三原（1997第2部）を参考にした。

＊14　語彙的アスペクト素性は鷲尾、三原（1997第2部）では意味素性という用語で表わされている。
またアスペクトによる動詞分類は近年ではSmith(1991)、Olsen(1997)が5～6に分類しているが筆者は従来の4つにとどめた。

＊15　結果動詞という用語については奥田（1978）に拠る。

＊16　たとえば例文(8)の「出る」にテイルをつけて「出ている」とした場合、結果（状態）の持続ではなく動作持続を表わしていることは明らかである。

＊17　「主節時視点」は三原 (1992) に拠る。

＊18　従属節事態先行型がなぜル形をとるかについての岩崎（1994）の説は＊22で述べる。

＊19　ここで述べる事象構造はBrisson(1994)、影山(1996)を参考にした。

＊20　動作の局面については森山(1988)などに拠る。

＊21　例えば

⑾　花子ガ泣クノデ、太郎ハアメ玉ヲ与エタ。(岩崎 (1994)、一部変える) において、太郎が主節の主語、「花子ガ泣ク」が観察した従属節事態、「アメ玉ヲ与エタ」が主節にさしだされる動作となる。

*22　岩崎(1994)は「主節の主語なる人物」の観察であるので、次の例文で示すように、知覚動詞を用いたように従属節の述語はル形になるとしている。

⑿　花子ガ泣クノヲ見テ（＝ノデ)、太郎ハ飴玉ヲ与エテヤッタ。

しかしこの説は、次の作例に見るように、従属節述語が瞬間動詞（＝到達の動詞）である従属節事態先行型が不適であることにより、肯定しがたい。

⒀　俳優ガ舞台デ倒レルノヲ見テ（＝タノデ／＊＝ノデ)、観客ハ大声ヲアゲタ。

*23　現象レベルについては2で既に述べた。

*24　沈(1984)も従属節述語が思考活動、心理状態を表わすような動詞（＝状態の動詞）の時は、従属節事態先行型（＝脱テンス）で同一主語になると述べている（4.1参照)。

参考文献

岩崎　卓（1994)「ノデ節、カラ節のテンスについて」『国語学』179集

沈　矛一（1984)「複合文の接続助詞でくくる節の述語のテンス「スルが」と「シタが」、「スルので」と「シタので」など」『語学教育研究論叢』創刊号 大東文化大学語学教育研究所

奥田　靖雄（1978)「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」『教育国語』53号 (33-44)、54号 (14-27)

工藤真由美（1989)「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜大学人文紀要』第2類第36輯

（1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房

向井留実子（1997)「トキ節の同時解釈と絶対テンス」『広島大学　日本語教育学科紀要』7巻

砂川有里子（1986)『セルフ・マスターシリーズ2 する・している』くろしお出版

森山　卓郎（1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

三原　健一（1992)『時制解釈と統語現象』くろしお出版

影山　太郎（1996)『動詞意味論』くろしお出版

益岡　隆志（1997)『複文』くろしお出版

鷲尾・三原（1997)『日英語比較選書　ヴォイスとアスペクト』研究社出版

Smith, Carlota. (1991) The parameter of aspect. Dordrecht:Kluwer

Tenny, Carol. (1994) Aspectual role and the syntax-semantics interface. Dordrecht: Kluwer

Brisson, Christine. (1994) The licensing of unexpressed objects in English verbs. CLS 30

Olsen, M, Broman. (1997) A semantic and pragmatic model of lexical and grammatical aspect. Garland Publishing, Inc

用例の出典

『CD-ROM版　新潮文庫の100冊』(発行：新潮社／発売：NECインターチャネル）より

冬の旅＝『冬の旅』立原正秋著　1969年

女社長＝『女社長に乾杯』赤川次郎著　1967年

新橋＝『新橋烏森口青春編』椎名　誠著　1987年

忍ぶ川＝『忍ぶ川』三浦哲郎著　1965年

月＝『月と六ペンス』モーム・中野好夫訳　1959年

二十歳＝『二十歳の原点』高野悦子著　1971年

雁の寺＝『雁の寺・越前竹人形』水上　勉著　1954年

あすなろ＝『あすなろ物語』井上　靖著　1969年

檸檬＝『檸檬』梶井基次郎著　1925年

太郎＝『太郎物語』曽野綾子著　1976年

悲しみよ＝『悲しみよ　こんにちは』サガン・朝吹登水子訳　1955年

剣客＝『剣客商売』池波正太郎著　1973年

パニック＝『パニック・裸の王様』 開高　健著　1960年
青春＝『青春の蹉跌』 石川達三著　1968年
コンスタンティ＝『コンスタンティノーブルの陥落』 塩野七生著　1983年
黒＝『黒い雨』 井伏鱒二著　1970年
花埋み＝『花埋み』 渡辺淳一著　1970年

〈付記〉本稿は本学の砂川有里子先生を始めとする諸先生方の数年間の授業等を通しての助言・御指導により得た知識を基に構成したものである。教えいただいた諸先生方に記して感謝申し上げます。

（かみなが　せいし　筑波大学院教育研究科　科目等履修生　茨城県立水戸南高校教諭）